

風と雲の便り

野殿・童仙房から……

野殿・童仙房へ…… vol.8

卒業式の季節がめぐってきた。
「ほたるのひかりまどのゆき
書(ふみ)よむつきひかさねつつ……」
卒業式の定番のおなじみのメロディーも
少しずつ歌われなくなってきている、と聞く。
たしかに、苦学や立身というイデオロギーを
子どもたちに押しつけるのは
時代錯誤というものだろう。
第一、蛍も雪も身近な風景ではなくなったのだから。
だが、このようなことをすべて差し引いても
「蛍の光」は、今なお贈る言葉として輝きを
失っていない、と思う。
そこには、学びたいという気持ちさえあれば
どんな環境にあっても学ぶことができる
というメッセージがこめられているからだ。
蛍も雪もあるけれども
卒業も卒業式もない〈がっこう〉
それが『風と雲の便り』である。



風の便り

野殿・童仙房地域における協働的な「学びの空間」をめぐるフィールドワーク

私たちは、京都大学大学院教育学研究科の研究者養成プログラムである、研究開発コロキウムに依拠して、2007年10月から野殿・童仙房地区にて調査研究を実施してきました。メンバーの大学院生4名は、次のようなテーマのもと、資料の収集や地域住民へのインタビュー調査を行いました。

- 「野殿・童仙房と京都大学の協働をめぐって」(児玉 華奈)
- 「I ターン移住者にとっての地域活性化—童仙房地区の事例—」(太田 拓紀)
- 「童仙房地区の歴史的形成と教育の関わりについて」(生駒 佳也)
- 「集落特性の継承について—野殿区の「集会」と「寄合」への着目から—」(辻 喜代司)

調査はほとんど手探りの状況からはじまりましたが、進展するにつれ、両地区の地域・歴史的特性や住民の意識について新たな発見の連続となりました。とくに、近代以前から続く伝統的な野殿地区と、明治の開拓事業でひらかれた童仙房地区は、高原地帯という地理的特性もあって、それぞれ独特の風土があるように感じられました。そして、調査でのなよりの収穫は、数多くの地域の方々と接する機会をもてたことでした。昔の苦労話をさせていただいたり、特産のお土産を頂戴したりなど、たいへん好意的に接していただきました。ご協力いただいた皆さま、誠にありがとうございました。とりあえずの報告書は2008年3月中旬に完成いたします。ご意見・ご批判をいただけましたら幸いにおもいます。



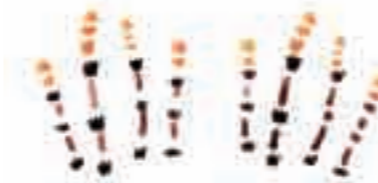
「地域通貨」を知ろう⑤

裸の王様——一物一価の世界から多物一価の世界へ

おとなは、だれも、はじめは子どもだった。
(しかしそのことを、忘れずにいるおとなは、いくらもない。)
サン=テグジュペリ『星の王子様』

自分にとって一番大切なものだから、誰かに貰ってもらいたいなど考えるおとながいたら、おとなの世界ではいくらか奇異に思われるだろう。欲しい物を手にする喜びと同時に、誰かに使ってもらいたいから出品する喜び。そのような気持ちは子どもの世界では至極まっとうなことだということに、おとなはどのくらい気がついているだろうか。また、もしも、世界中の品物がどんなものでも、同じ値段で買うことができるとしたら、どうだろう。こんなことは、想像してみるだけでも楽しいものだが、子どもの世界に地域通貨を導入する実験的な試みは、このような世界を垣間見せてくれる。子どもたちが持ち寄った品々は、おとなの尺度(市場価値)では測れない、子どもの価値観からみた多彩な意味を持った品々である。それは単なる不用品交換の場ではなく、物にまつわる思い出が移譲される場でもある。くしゃくしゃのポケットから取りだしてきたティッシュペーパーであろうが(それは子ども本人にとってかけがえのないものであるかもしれない)、家庭から持ち出された高価な贈答品であろうが、物ひとつには変わりが無い。「チャオ！」一枚が交換されるだけだ。それでも子どもにとって、好きなものを選べるのだから十分魅力的だ。子どもが地域通貨を使ってみる、というのは、単に市場経済の仕組みをいち早く学ぶ予行演習でもなければ、算数の応用実践にも還元されない。むしろ、貨幣というものが、共同幻想の産物であることを、身をもって体験することに意味がある。おとな自身の現在の暮らしのスタイルを子どもたち自身が告発する契機にもなりうるものだ。星の王子様も、ピーターパンでない限り、歳をとる。王子様がおとなになったとき、「王様は裸だ！」といわれぬなど誰が断言できよう。

前平泰志 Yasushi MAEHIRA 京都大学



注：昨年秋の「風と雲の広場」での「チャオ！」という地域通貨の仕組みのあらまは、『風と雲の便り』第6号に掲載されている児玉華奈さんの「チャオ！」の芽生えるとき」に説明されているので参照いただければ幸いです。

今後のお知らせ、詳細などは <http://souraku.net/manabi/>

京都大学問い合わせ先：教育実践コラボレーション・センター
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院教育学研究科
TEL:075-753-3075

野殿・童仙房問い合わせ先：野殿童仙房生涯学習推進委員会
〒619-1401 京都府相楽郡南山城村大字童仙房小字三郷田199番地2
会長 中村富士雄/副会長 西村秀俊

2008年3月26日発行
発行：京都大学大学院教育学研究科
教育実践コラボレーション・センター
「教育空間創造ユニット」
編集：前平泰志
編集協力：元根朋美
版画協力：馬場正幸
制作：(株)松籟社

2007 年度 京都大学 野殿・童仙房での生涯学習の取り組み

京都大学がフィールド研究の一環として、野殿・童仙房地区を訪れてから2年になります。以下は2007年度1年間の活動をQ & A形式でまとめたものです。

Q1. 当地域での活動はどのような趣旨でいつから行われているのでしょうか。

2006年度より始まっていますので、今年は3年目に入ります。2006年3月に廃校になった野殿童仙房小学校を拠点として、地域の方との協働で新しい空間創りを始めています。地域で「野殿童仙房生涯学習推進委員会」が立ち上がり、2006年6月23日に京都大学大学院教育学研究科と野殿・童仙房地域が協定を結びました。行政主導型ではなく、地域住民と大学と一緒に関わりながら、生涯学習とは何か、学びとは何か、ということ問い直し、地域が抱える問題とも向き合いながら、子どももおとなも一緒に学んでいけるような空間を、そして私たちの生活と学習を結びつけるような空間を、自ら積極的に創っていかしています。

Q2. 今年度はどのような活動が行われたのでしょうか。

「風と雲の市」や「風と雲の広場」を行いました。これは、子どももおとなも地域内外から気軽に集うことができ、童仙房という自然の中で、勉強でも遊びでもあるような、あるいは勉強でも遊びでもないような場を創ってみようと思ったものです。また、農業体験は2年目を迎えました。夏には、工学部の夏季合宿、秋にはエクステンション講座も実現することができました。

Q3. 地域通貨「チャオ！」とはどのような取り組みでしょうか。



簡単に言えば、各自で持ち寄ったものの物々交換の広場です。1つの物を持ってくると、1「チャオ！」がもらえます。その「チャオ！」を使えば、「チャオ！」の広場にあるものはどれでも1「チャオ！」で交換することができます。多物一価の仕組みです。子どもたちは、この「こうかん」をととても楽しみにしています。10月には物にメッセージをつけるという試みも行いました。地域通貨は、法定通貨や市場の原理とは少し違った意味をもたらしてくれます。これからも、新しいコミュニケーション・ツールとして「チャオ！」の仕組みも進化させながら続けていきたいと思っています。

Q4. エクステンション講座では、どのようなことが行われたのでしょうか。

エクステンション講座とは、大学などが別の場所で公開講座などを行うことですが、もともと「エクステンション」は農業改良事業から派生した言葉で、アカデミズムの学問の農学が現場の農業と乖離しすぎたため、大学を離れて現場に行って現

場から学ぶことが求められたところから始まったものです。童仙房では第1回目のエクステンション講座として、京都大学総合博物館の大野照文先生に講師を依頼しました。子どももおとなも一緒に、三葉虫の化石をスケッチして、どのように身を守ったか、どのように脱皮したのかなどを考え、化石の世界にタイムスリップしました。



大野先生の魅力とともに、探究していくことの面白さの一端が伝わったのではないのでしょうか。

Q5. 音楽の企画とはどのようなものでしょうか。

地元有志の親子による和太鼓グループ「野童太鼓」のメンバーが力強く演奏してくれました。また、教育学部の学生もメンバーの一人である音楽創作ユニット「rimacona」は、自分達のオリジナル曲に加えて、地域を歩いて地域の音を採録し、その音を活かした即興の音楽も演奏してくれました。音という地域の素材を音楽に変えていくという企画は大変興味深いものと思います。

Q6. 〈虹色万華鏡?〉を作るコーナーとはどのようなものでしょうか。

紙コップに特別なフィルムを貼り、反対側に黒い画用紙を貼って穴を開けると、虹色の世界が現れます。穴の開け方で光の見え方も異なってくるので、子どもたちは楽しそうでした。また、ストローと紙コップを使って音が奏でられる〈ストロポン〉の工作もありました。この企画は、大阪府立千里高校の非常勤講師をされている江角陸先生のご協力により実現しました。



Q7. 料理の企画があったと聞きましたが、どのようなことがされたのでしょうか。

はい。「味覚と他の感覚を重ねあわす—もうひとつの生涯学習」ということで、銀閣寺近くの創作和食料理店 sun-aid Eisuke の店主、阿山哲生さんのご協力のもとに6月に実現しました。旬の味を生かした料理を味わおうということで、料理の実習から講義までが行われました。「食」には、作る過程も含めて、味覚だけでなく、音、匂い、触る、見るなど様々な感覚が重ねあわされていることに改めて気づかされました。また、

阿山さんは地域から発信できるものを、という思いから、当地の特産であるお茶と猪肉を組み合わせて「猪肉のお茶の葉燻製」という料理も創ってくれました。今年の農業体験の収穫祭にも、大根やさつまいもなど収穫した野菜を使った料理作りと一緒に関わってくれました。

Q8. 農業体験について教えてください。

「昔子どもだったおとなと今の子どもと未来の子どものための農業体験」と銘うった農業体験は、昨年に引き続き2年目となりました。この取り組みは、農作物が育っていく驚きといのちを育てる労働の喜びを、おとなだけでなく子どもたちにも知ってもらい、この経験を次世代の子どもたちに伝えてほしいという願いから発したものです。間引き作業など、皆で関わりながら育てた野菜を、収穫祭で料理をして一緒に食事をするとは、なんともいえない喜びがあります。南山城村の秋の祭典では、野殿童仙房生涯学習推進委員会として地域の人と一緒に出店しました。今年はあまり立派な大根が育たなかったという失敗もありましたが、それもまた逆に私たちに多くの話題を提供する素材のひとつになりました。

Q9. このようにしてみると、色々な分野の方からの出会いが生まれているようですね。

はい。この活動に関心を持ってくださる方が地域内外、大学内でも少しずつ増えてきていることは大変うれしいことです。9月には、企業の若手研究者や大学院生が集い、「京都大学材料工学スクール2007年夏季合宿」も行われました。色々な人の体験や知恵が生かされていく、それがこの空間を創っていく楽しさ・醍醐味でもあると思います。様々な関わりやコミュニケーションが生まれていく中で、野殿・童仙房という空間自体も育ちつつあるといえるのではないのでしょうか。

Q10. 今後の活動予定はどのようなものでしょうか。

3月の初めに、地域住民の方と教育学研究科の教員・院生と一緒にこれまでの活動を振り返り、今後の活動について考える機会をもちます。地域の方から院生の声を聴きたいというご意見もいただいています。当活動では、野殿・童仙房地域と大学とが少し離れていることもあり、対面での話し合いの他に、メーリングリストを使って活動の企画相談や議論も行っています。すでに2000通近くになっています。昨年度、「フィールドを立ち上げる」ということでスタートしたこの取り組みですが、3年目を迎える来年度は、また新たな展開が生み出されればと思います。

この野殿・童仙房地域での活動は、2007年度より京都大学大学院教育学研究科で行われている、平成19-23年度「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」の中で新設された教育実践コラボレーション・センターにおける「教育空間創造ユニット」の活動として取り組んでいます。なお、このまとめは、同センターの広報用冊子『子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして』(平成20年3月)に掲載された文章を一部修正したものであることをお断りしておきます。

2007 年度 京都大学 野殿・童仙房地域における活動一覧

4月21日	寄贈図書の搬入 「風と雲の市」の打ち合わせ
4月28日	「風と雲の市」準備作業
4月29日	「風と雲の市」開催 地域通貨「チャオ！」の広場 「円」の広場 野童太鼓
4月29日	広報誌『風と雲の便り』第5号発行
6月9日	「味覚と他の感覚を重ねあわす—もうひとつの生涯学習」 (講師:阿山哲生さん、sun-aid Eisuke)
7月1日	生涯学習推進委員会の畑・草引き
7月15日	第2回「風と雲の市」(台風のため中止)
7月15日	広報誌『風と雲の便り』第6号発行
8月25-26日	「昔子どもだったおとなと今の子どもと未来の子どものための農業体験」 (種まき・苗植え) 地域の方との交流会
9月14-15日	「京都大学材料工学スクール2007年夏季合宿」
9月29日	農業体験・畑作業
10月13日	農業体験・畑作業
10月19日	広報誌『風と雲の便り』第7号発行
10月27日	「風と雲の広場」準備作業
10月28日	「風と雲の広場」開催 エクステンション講座「化石に触れよう」 (講師:大野照文先生、京都大学総合博物館 教授)
	「〈虹色万華鏡?〉を作ろう」 (講師:江角 陸先生、大阪府立千里高等学校 非常勤講師)
	「rimacona ミニコンサート」 (柳本奈都子さん、原摩利彦さん〔教育学部4年生])
	「野童太鼓」 地域通貨「チャオ！」の広場 「いつでも だれでも なんでも マーケット」
11月3日	「原木栽培によるしいたけを食べる—学びを編みなおす旅へのいざない」 (講師:柳田豊久さん、地元の原木栽培のしいたけ農家)
11月18日	農業体験・収穫祭
11月23日	南山城村「活き生きまつり」 (収穫野菜やそれを使った料理を出店)
3月8-9日	「研究開発コロキウム」の報告会 今年度と来年度の活動についての話し合い
3月26日	広報誌『風と雲の便り』第8号発行